色丹島の自然を垣間見て

◎
村元 健治
（札幌市、北海道自然観察協議会理事）

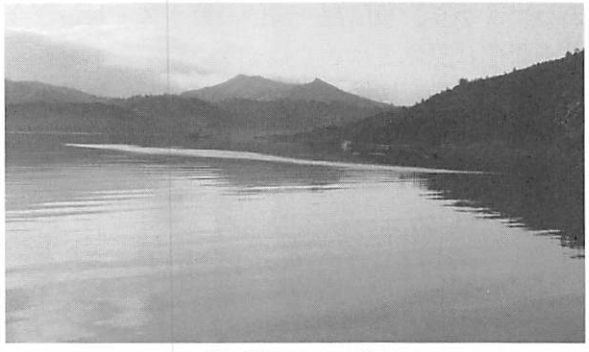
昨年（2012年）の9月に、千島歯舞諸島居住者連盟が実施するビザなし自由訪問で北方領土の色丹島を訪れた。日程は3日間となっていたが、肝心の同島の滞在は、2日目の朝から夕方までのわずか1日間だった。そんな短時間での駆け足訪問だったので、じっくり見たというものではなく正に垣間見たというものだった。

色丹島は、根室から北東に80 kmほど行ったところに位置するが、この島は標高が400 mほどのなだらかな丘陵地と変化に富む海岸線があって非常に魅力的な島だ。

最初の訪問地は、島の北側にあるアナマだった。ここが我々を乗せた船（道のエトピリカ号）が港に入ったところだ。このアナマ湾の形は、幅が狭く奥行きがあるもので、細長い水路もしくは北欧等でよく見られるフィヨルドに似た感じのものだった。湾の両岸は、下が広葉樹で覆われているのに対し、上は笹原の間に針葉樹が散見されるという具合で、遠くから見ると笹原の緑の絨毯の中に針葉樹が屹立していてうっとりとするような光景だった。水深はかなりあるようだったが、フィヨルドのような地形のため波も全くなく、鏡のように穏やかであった（写真1）。そんな中で、予想外の光景として目を見張ったのが、北海道の駒ガ岳そっくりの山が港から見えたことだ。（写真2）

この後、島の西側にある稲茂尻というところに行った。ここは港もなく、人は誰も住んでいない

1　フィヨルドのようなアナマ湾（港側から外海を眺めたもの）



2　駒ガ岳そっくりな山

ところだが、ここも中々美しい場所だった。ここの特徴は、沖合い1～2km先にミニ島というか、あるいは巨石にも見えるようなものが2つほどあって丁度湾を塞ぐように存在することだ。こうした地形によりここも、波静かで聞こえるのは、砂浜に打ち寄せる波の音だけだった。湾の両サイドは、これまた緑の絨毯を敷き詰めたような笹原で覆われていた。

1992年に香港の企業がこの地を借りて、一大レジャーランドにするという計画がマスコミで取り上げられたことがあったが、そうした計画も頷けるほどの景色だった。波打ち際を見て、思わずビックリしたのが、小山のように浜辺に打ち上げられた昆布だった。

次に訪れたのは、斜古丹地区。ここは同島のメイン地区だけあってアナマと比べて住宅数、商店も多かった。この湾は、ほぼ円形で入り口が1箇所で現在、ロシアの軍港になっている。港の横に聳え立つのが、島の中で最も高い斜古丹富士と呼ばれる標高413mの「斜古丹山」だ。遠くから眺めると、富士に似た山をバックに、丸い形の湾が鎮座するというもので、これまた絶景の景色だった。

ただ残念だったのは、軍港ゆえ、湾内に軍艦が入港しているとのことで、堅く写真撮影が禁止されたことだった。過去にその禁を破って撮影し、

3　風光明媚なマタコタン

一晩留置場に突っ込められた旅行者もいたということを聞いて、非常に驚くと共に、眼に見えない監視網が張られている感じがして、空恐ろしさも感じた。

最後に訪れた所は、マタコタンというところ。アナマと斜古丹をつなぐ道路の近くにあった。稲茂尻と同様、ここも全くの無人だったが、風景は抜群だった。双頭の峰を持つ赤茶けた色の山をバックに、紺碧色をした小さな湖が横たわっており、まるで一幅の絵を見ているようだ（写真3）。そんなうっとりするような光景に夢見心地に浸りながら見入っていると、湖の端の方から何やら白い煙のようなものがたなびいていることに気づいた。

それは正に煙そのものだったが、火山の噴煙ではなくゴミ捨て場のゴミが発火して燻って立ち込める煙そのものだった。これには全く興ざめした。この煙、実は最近になって立ち込めたものではなく、もう何十年もなるものだと聞いてあきれ返ってしまった。せっかくの一連の美しい景色も、このひとことですっかり色あせてしまった感じがした。

同島での、こうしたゴミの処理も含めた道路、港湾等のいわゆるインフラの整備は、決していまだ十分と云い難く、我々、日本から行った者の目から見れば、非常に遅れている印象を受けた。その光景は高度経済成長時代前の昭和30年代の北海道の状況にそっくりだと思った。

いずれにしても、そうした失望させるというか、意外な一コマもあったものの、全体を通じて同島の自然景観は、開発の手も殆ど入っていない、手付かずの状態のものが見受けられるというものだった。

同島を含む領土問題は、将来どのような決着になるのか全く予測もつかないところだが、どのような形になろうとも、今や貴重な自然景観を残す島としてきちんと保全をしていくことが極めて重要なことではないかと痛感した。